横田消防署２４時

24 hours with Yokota fire and emergency services

April 10, 2016

Original text by Airman 1st Class Elizabeth Baker
374th Airlift Wing Public Affairs

横田基地の消防士たちの日々の任務について知り、普段、報道では見ることのできない、更にその奥深くを探るため、横田消防署（第374施設中隊）の仕事に24時間密着した。

消防署の仕事は、防火服と火災時のサイレンが全てではない。24時間体制の運用から、人命救助のためのスタッフ・ミーティングまで、同署で私が目にした消防士たちの日常の一部を紹介したい。

横田消防署の一日は、シフトの引継ぎ「ロール・コール（招集）」で始まる。24時間体制の運用を担うため、前のシフトの隊員から次のシフトの隊員へと引継ぎが行われる。隊員たちは就業中、仕事以外の理由で消防署から離れることはできない。出動のサイレンで瞬時にその場の作業を止め、また仮眠から直ちに目覚め、災害が発生した場所へ急行する体制を昼夜維持している。24時間、彼らが守るのは、住居、航空機、人命だ。隊員たちは、外傷を負った人を死の淵から救ったり、燃え上がる建物から多くの命を救ったり、または、急行した先の状況によっては何もしなくてよいこともある。

横田消防署本部で出動待機する消防車

隊員たちは、出動した際に適切に器材が機能するよう、毎日、消防車の点検を行う

「多くの人が、我々の仕事の90％は暇で、10％だけ全力で働くと言う。緊急時に出動できるためには、その90％にこそ価値がある」と消防署運用チーフのシャウン・エドゲコウム技能軍曹は言う。

エドゲコウム技能軍曹は消防署勤務歴10年。仕事を始めた頃の様子について聞いた。

「初めの頃に受けた何度かの通報で、自分は人命を救うために急行したつもりだったが、ポップコーンを焦がしたとか、そういう類のものだったというのが印象に残っている。時と共にそれも慣れてきた」とエドゲコウム技能軍曹は語る。

トーマス・スミス一等空兵は、横田消防署で消防隊員として初の任務に就いている。仕事を始めてみて、それが思い通りだったか聞いてみた。

「ほどんどが思ってもみなかったことだった。想像以上に、細部に重点が置かれている。火に水をかけるだけでなく、もっとそれにまつわる、ありとあらゆることを知っておかなくてはいけないことを知った」とスミス一等空兵は述べた。

横田消防署で行われた朝のミーティングで、その詳細の一部を垣間見た。エドゲコウム技能軍曹は、全隊員たちに、化学反応を起こしやすい炭化水素系ガスとロープや他のものを一緒に保管しないよう念を押した。また、緊急出動した際の報告書の記載方法や、日課となっている消防車の検査について、全ての車両が即応できる準備が整っているようにと、細かな指示がなされていた。車両に備わっているありとあらゆる道具はそれぞれ定位置におかれ、必要時に即座に使えるようにしなくてはいけない。隊員たちが日々適切に管理しなくてはならないものの詳細リストは延々と続く。

「我々の仕事で大事なことは、決して自己満足しないこと。思いもしない時や何かのチェックを怠った時にこそ、その報いが来る」とエドゲコウム技能軍曹は言う。

朝のミーティングの後、日課の消防車両整備検査、消防訓練、清掃、昼休み、そして更にまた消防技術訓練、消防機材の清掃へと続いた。

シフト交代時はロール・コール（招集）で始まる。毎朝、24時間勤務した前のシフトの隊員から交代する

消防訓練の時間、隊員3人が車両から脱出する方法や車をこじ開ける方法を練習するために基地内の消火訓練施設へ向かった。ガラス窓を壊し、フロントガラスを開けるためにノコを引き、ジョーズオブライフを用いて車体の一部を切り離し、てこを使ってドアを開けた。実際の救助時、このテクニックが車両に閉じ込められた人に怪我を負わすことなく救助することに役立つ。人の命が、自分の行動の早さと正確さにかかっているとはどのような心境だろうか。

「人の命が自分の手にかかっていることは重大な責任だ。この仕事を長く続けられるのは、人々を助けたいという信念があるからだ。誰かの一日が良いものになるよう役立ちたいと思っている」とエドゲコウム技能軍曹は語る。

一方で、スミス一等空兵は彼独自の考えを持っている。

「結婚し、物の見方も変わった。火災現場に急行する時、火が出ている建物の中にもし自分の家族がいたらどれだけの時間待たさせられるか思いを重ねる」とスミス一等空兵は言う。

ジョーズオブライフを使って車のドアをはずす横田消防署のスティーブン・タイラー上級空兵

ジョーズオブライフの重さは約32キロ。この器材を使って安全に車体の一部をはずす技術が求められる

車両救出トレーニングの間、消防隊員たちは連携を組んで任務に臨んだ。途中、互いに冗談を飛ばしながら、親しい仲間関係も見せていた。

「消防隊員は多様だが、概して共に長い時間を共有していることからとても強い絆で結ばれている。“個々の家族があり、消防隊員の家族がいる”という言い方をよくする」とエドゲコウム技能軍曹は述べた。

午後3時に消防隊員たちはエクササイズに励んだ後、休憩に入った。消防署建物には、ジム、バスケットコート、キッチン、談話室、寝室、シャワールームなど、夜間も使える身の回りの施設が全て整っている。仮眠室は広くないものの、それぞれの隊員に個室が与えられ、ベット、机、クローゼットが備わっている。天井の隅にはオレンジのストロボ灯がつけられ、インターコムは微量の音を出しながら夜通し繋がった状態だ。

米空軍入隊時の基礎訓練で、大音量の音楽で起床したのを覚えているが、睡眠中に緊急出動指令が出るとはどのような心境だろうか。

「人生で忘れもしない記憶だ。穏やかな睡眠から、咄嗟に起き上がり出動する。それを実践できるよう、訓練を乗り越えていかなくてはならない。実際の時は、すぐに出動態勢に入り“人を救うために何ができるか？これはどれだけの火事か？”と頭を切り替える。」

一日の終わり、消防署隊員たちは談話室でリラックスし、会話を楽しんだりテレビを観る。隊員のうち、数名は夜間の異なった時間に起床し、基地内の点検をして回ったが、その夜は通報が入らなかった。だが、明日は何か起こるかわからない。

横田消防署内のジムで体を鍛える消防士たち

施設内には仮眠室、シャワールーム、ジム、キッチンが備わっていて、消防士たちがいつでも緊急に備えられ、建物を離れなくても用が足せるようになっている

エドゲコウム技能軍曹は、消防士を務めるには決心が必要だと述べた。消防署には、当たり前の日がない。隊員には、そうした生活に対応できる柔軟さが必要だ。時に、負傷者や死者が出るような現場に救出に行く際などは大きなストレスを伴う。エドゲコウム技能軍曹は、「ストレスに耐えられるだけの相応の自己耐久力を持っていなくてはならない。だが、また消防署の家族にも頼らなくてはならない」と言った。

エドゲコウム技能軍曹に、除隊か退役した際に何が一番記憶に残ると思うか聞いた。彼は、数え切れないろんな思い出があるだろうと言った。答えを見出す間、彼はしばらく考え、「世界のあらゆる場所に行った。その間、飛行機が墜落するのも見てきたし、建物が崩壊したり、車が押し潰されるのも見てきた。人は生き、人は亡くなる。そうした現場に居合わせ、災害の中で救いの一助となれた。人の人生を変えることができた誇りを記憶に刻むだろう」と述べた。